研究推進校事業報告書

＜取組と成果のポイント＞
○　講師を招いた講座実施と研修会参加による道徳教育への理解の底上げ
　教員の道徳教育への理解の深まりとその可能性への期待の高まりが見られ，深い思考とかかわり合いを伴った授業の実現がよりよい生き方を求める生徒の育成につながることが共通認識となった。
○　教材開発のための資料整備
　生徒の心を揺り動かすことのできる教材の開発を可能にする環境が整った。
○　指導案作成と授業公開
　素材探しから始まって，工夫された指導案の作成を経験し，その授業を第３者から評価されることで，道徳の授業の質を高める努力を継続させる意欲が教員の共通の意識となった。

１　研究推進校（又は推進地域）の概要

学　校　名	所　在　地	電 話 番 号	児童生徒数	備　考
瀬戸市立水無瀬中学校	瀬戸市原山町１番地	0561(82)3098	５７１人	

２　研究課題
（１）　自己肯定感を感じて生活する生徒を育む道徳教育
・　学級アセスメント（Ｑ－Ｕ）による生徒の状況把握の取組
・　「命の授業」で、生まれてきたことへの感謝と自己肯定感を高める取組
（２）　他者を共感的に理解する生徒を育む道徳教育
・　ＳＳＴ、エンカウンター等を効果的に用いたかかわり合いを中心においた授業の工夫
・　どんな発言も受容され、生徒が安心して発言することのできる授業環境の実現
（３）　生き抜く力を身につけようとする生徒を育む道徳教育
・　地域との協力の中で、学校教育全体を通じて行われる生徒の道徳的価値観を高める取組

３　研究主題とその設定理由
（１）　研究主題

自己を見つめ、よりよい生き方を考える生徒の育成

－生徒の心に響く、かかわり合いを中心においた指導方法の工夫を通して－

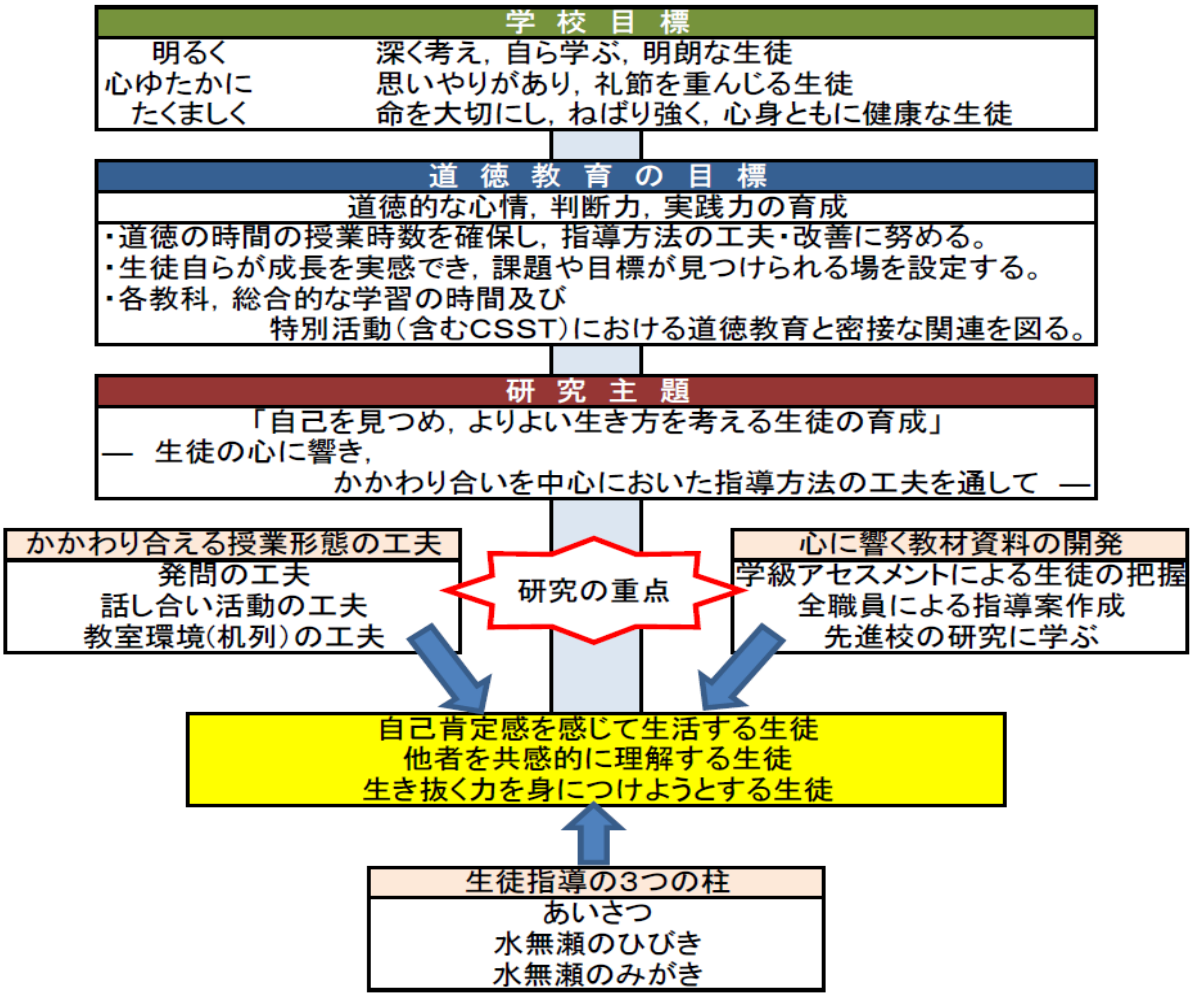
（２）　主題設定の理由
　本校では、道徳教育の全体計画と道徳の授業の年間指導計画に基づき、道徳の授業を中心に、各教科、総合的な時間、特別活動及び部活動とも関連を図りながら、学校の教育活動全体を通して道徳教育に取り組んできた。
　これまで、道徳教育の実践の中でもってきた問題意識は２つある。１つは、若い教員がどんどん増える中でも、道徳の授業の質を決して落とすことなく進めていく必要があったという点である。もう１つは、道徳の授業が、学年行事の準備のために使われてしまったり、担任の授業が遅れているときに教科の授業に変わってしまったりするようなことがあってはならないという点である。その問題意識のもと、５年前より、２つの取り組みを行ってきた。
１つは、誰もが、自信をもって道徳の授業を行える環境を作ることである。道徳部会（現在は道徳教育推進委員会）を中心として、生徒の現状から感じられる、身につけさせたい規範

意識や価値観を扱った教材の開発や指導案の作成に取り組んだ。各学期初めには、年間計画と学年の状況を照らし合わせて計画を練り直しながら、各学年に教材と指導案を提案し、どのクラスもその資料を使った道徳授業を行ってきた。また学期末には、その総括を行い、積極的な面と問題点を明確にして、授業改善に取り組んできた。もう１つは、各クラスの道徳の時間を確保できる環境を整えるという点である。月曜の集会の延長の可能性が考えられる月曜１限に道徳を設定しないようにしたり、他の学年の活動に振り替えられることのないようにしたりしてきた。

研究の当初においては、授業後の感想は、大変積極的でまじめな感想を書く生徒が多いものの、高めた道徳的価値を実践に生かす力は十分とは言いがたく、人間としての生き方についての自覚を深める指導をさらに充実させることが重要な課題となっていた。「自己を見つめ、よりよい生き方を考える生徒の育成」を掲げたのは、まさに、この実践力の向上の重視を示していたからである。いじめ・不登校対策推進委員会や現職教育推進委員会とも協力しながら、すべての教員が教材開発や指導案作成に取り組み、授業を公開していく体制を取るなかで、生徒の実践力を高めるべく、前述の研究主題を設定することとした。

サブテーマは、－生徒の心に響く、かかわり合いを中心においた指導方法の工夫を通して－とした。「心に響く」という部分は、２つの要素がある。１つは、道徳の授業を構成するに当たっての教材開発の技術を教員が身につけるという考え方である。もう１つは、学級アセスメント（以下Ｑ－Ｕ）の結果を把握し、その結果に基づいた教材開発を進めることであった。また、「かかわり合いを中心においた指導方法」は、本校が現職教育において取り組んできた授業力の向上を目指す取り組みにおいて重視してきたテーマでもある。すべての教科はもちろん、道徳においてもこのスタンスは大切にしていきたいと考えた点であった。

〈道徳教育推進研究全体構想図〉



道徳教育の全体計画

教育関係法規等

日本国憲法
教育基本法
学校教育法
学習指導要領

学　校　教　育　目　標

○　明るく　　深く考え、自ら学ぶ生徒
○　こころ豊かに　思いやりがあり、礼節を重んじる生徒
○　たくましく　　命を大切にし、ねばり強く、心身ともに健康な生徒

地域・家庭の願い

・　他人に迷惑をかけず、思いやりがある。
・　規律ある生活をし、健康的で活発に行動する。

道徳教育の重点目標

学校の教育活動全体を通じて、人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的な心情、判断力、実践力（実践意欲と態度を含む）を育てる。

・　望ましい生活習慣を身に付け、自主自律の態度を伸ばし、社会性豊かな生徒を育てる。

・　向上心を持って、物事に誠実に取り組み、ねばり強くやり遂げる意欲を持った生徒を育てる。

・　生命を大切にし、人間尊重の精神を持って、未来に向けて人生や社会を切り拓こうとする生徒を育てる。

生徒の実態

・　明るく人なつこい。
・　級友や他の人と上手にコミュニケーションをとれない生徒が多い。
・　進んで物事に取り組み、ねばり強くやり遂げる経験に乏しい。

教科指導

国語	文字や言葉で伝え合う学習を通して、他者との円滑な意思疎通能力を身に付け、社会性の向上を図る。
社会	社会的事象について、学習するなかで、合理的かつ公正な判断力を育てる。 基本的人権を尊重し、社会との関わりのなかで自ら向上しようとする力を養う。
数学	物事を筋道立てて考える力を養う。
理科	自然への理解を深め、自然を愛する心を育てるとともに、科学的なものの見方や考え方を養う。
音楽	音楽を通して豊かな感性と協調性を養う。
美術	自分や友達の作品・道具・教室を大切にする態度を育てる。
保健体育	自己の責任を果たしながらの競争や協同の経験を通して、仲間とともに運動するすばらしさを共有しようとする態度を育てる。 ルールやマナー、勝敗に対する公正な態度を育てる。
技術・家庭	社会の変化に主体的に対応できる人間の育成を目指して、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。
英語	言語や文化を学ぶ中で自己や異文化に対する理解を深め、関わり合いながらコミュニケーションする能力を養う。

各学年の道徳教育の重点目標

1年	・　望ましい生活習慣を身に付け、心身ともに健康な生活を送る。 ・　感謝と思いやりの心をもち、集団の一員として協力し合うことの大切さを自覚させる。 ・　何事も誠実に実行して、進んで勤労する心を育てる。
2年	・　自ら物事を正しく判断し、責任をもって最後までやり抜く態度を身に付けさせる。 ・　自分のよさを伸ばすとともに、他者の立場を尊重し、ともに高め合う態度を育てる。 ・　礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動が取れる。
3年	・　自分を見つめ、目標に向かって堅実に積み上げていく態度を身に付けさせる。 ・　真実に向かう人生の素晴らしさを知り、人としての生き方についての自覚を深めさせる。 ・　秩序ある社会の一員としての自覚を深め、信頼される言動が取れる。

特別活動

・　実践を通して集団の一員としての役割を認識させ、認め合い、協力しあって活動できる態度や能力を育てる。

総合的な学習の時間

・　体験や触れあいを通して自分らしく他を尊重しあい、共に生きる力を養う活動を進める。

進路指導

・　自らの生き方を考え、主体的に進路選択できる力を実現する。

生徒指導

自己を見つめ、他を思いやり、けじめのある生活を実現する。
・　生徒理解を深め、責任と自覚をもって行動できる生徒を育成する。
・　こころの通い合う温かい人間関係を育成し、いじめ等のない集団の高まりを作る。

各学級の重点目標

今年度の道徳の時間の指導方針

①　道徳の時間は、道徳教育の要（かなめ）である。

②　各学年の道徳担当者を中心に計画し、指導を進める。

③　道徳の時間の充実を目指して、授業時間を確保し、生徒の実態に応じた資料と指導方法の工夫・改善に努める。

④　生徒自らが成長を実感でき、課題や目標が見つけられる実践の場を他の教育活動と連携して設定する。

⑤　各教科・総合的な学習の時間及び特別活動（含CSST）と密接な関連を図る。

特別支援教育

社会的自立をめざす教育を実現する。
＜特別支援学級　道徳＞
障害に基づく種々の困難を乗り越え、生きる意欲と明るい生活態度を養う。

家庭・地域の連携

学校の目指している道徳教育 について、通信・たより・懇談会を通じてＰＲを行い 、家庭教育と学校教育との相互理解を深める。

特色ある学校

地域に学び、地域とともに育ち、生き方の視野を広げる。

４　研究の概要及び特色

主題に示した生徒像の実現をめざして、以下の取り組みを行った。

（１）　研究内容についての検討会

道徳教育推進委員会は、道徳教育推進教師を中心に、学期の初めと終わりに、それぞれの学年で取り組む道徳の内容について、教材の決定と指導案の作成と計画の立案を行ってきた。今年度は、それに加え、各担任が自分のクラスで実施する道徳の指導案作りと、現職教育推進委員会がＱ－Ｕの結果に基づいて、実施を提案する指導案、それにいじめ・不登校対策推進委員会が作成する、生徒の自己肯定感を増すことやいじめのない学校づくりを進めることをねらいとした指導案の作成にもかかわった。たくさんの資料を用意し、教材探しを容易にしながら、各職員が意欲的に指導案作りに取り組める環境の整備に取り組んだことで、職員は、全員が指導案作りに取り組むと共に、その作成に慣れ、クラスの実態に応じて、生徒たちの心に響く教材開発をする手立てを身につけてきた。教材開発に対する問題意識の深化については、愛知教育大学の鈴木健二教授の講座で研修した成果である。

（２）　講師を招いての学習会・授業研究会

授業実践を行い、研究主題の実現に向けた取組を実際に行っていく職員の学びの場として、５回の学習会を設定した。

１回目は、本校の状況だけでない、現状における道徳教育の到達点と課題を学ぶ機会として、瀬戸市道徳教育研究会会長、瀬戸市立陶原小学校校長の前田芳穂氏をお招きし、「道徳教育の現状と課題」というテーマで講義をしていただいた。「道徳教育」と「道徳の時間」の違いといった基本的なことから、総合単元的な学習のなかに道徳の時間を位置づける実践の紹介、道徳の教科化による評価の問題まで、多岐に渡り、しかも参加者の質問にも詳しく答えていただいた。

２回目は、生徒の状況に応じた教材の設定とかかわり合いを中心においた指導法の模索のため、学級アセスメント（以下Ｑ－Ｕ）とエンカウンターやＳＳＴに詳しい名城大学講師、杉村秀充先生においでいただき、「ソーシャルスキルと道徳」というテーマで講義をしていただいた。ＳＳＴやエンカウンターは、生徒のかかわり合いを積極的につくる上で有用ではあるが、ＳＳＴ、エンカウンター＝道徳ではなく、あくまで道徳的価値を高める手段として道徳の授業の中で位置づけることの必要性を学んだ。

３・４・５回目の３回は、愛知教育大学教授、鈴木健二氏を招いて行った。１回目は、道徳の授業の構成の基本を学ぶために、鈴木氏と職員による模擬授業の体験を行った。２回目は、道徳の指導案作りを進める上での教材開発の方法について学んだ。

（３）　全職員による指導案作りと道徳授業公開

これまで、本校の道徳の授業は、道徳教育推進委員会が中心となって、指導案作りを行い、その指導案をもとに各担任が同じ授業を行う形態をとってきた。これは、若い教員の占める比率が高いなかでも、高いレベルの道徳の授業を行うことを可能にするための方策であった。しかし、生徒指導上の問題を抱えた生徒が減り、学校全体が落ち着きを取り戻すなかで、すべての教員が学級の実態に応じた授業を行っていくための指導案を作ることや、指導案作成の経験をしていくことも、道徳教育への理解を深める上で不可欠となり、全員が指導案を作り、授業公開に取り組むこととなった。

また、今年度は、道徳教育推進委員会だけでなく、教育相談やいじめ対策マニュアルの作成をしてきた，いじめ･不登校対策推進委員会とＱ－Ｕを学級経営の方策を立てるための重要な資料としていくことを位置づける現職教育推進委員会も、委員会としての指導案作りを行った。いじめ・不登校対策推進委員会は、いじめのない学校づくりをめざした指導案や、自己肯定感を高めることを目的とした指導案の提案がされ、また現職教育委員会からは、ルールとリレーションに課題の見られるクラスに効果があるＳＳ

Ｔを使った指導案の提案が各学年の状況に応じた形でなされた。こちらは年２回のＱ－Ｕの実施後の結果に応じた形で実施された。

（４）　研究会参加

先進的な取組に学ぶ教員を育て、学校にその経験を返していく取組は、本校のみの、内に閉じこもった研究にならないためにも、またダイナミックな発想をすることでさらに実践を進める上でも重要である。今年度は、夏季休業中に千代田区の日本教育会館で行われた、「第５６回指導と評価大学講座」と昭和女子大学で行われた「心を育てる教育研究会」にそれぞれ１名の教員が参加し、キャリア教育を通して道徳教育でどんな力を身につけるべきか、ＩＣＴを活用した授業改善、主体的な学びを引き出す教材開発、「私たちの道徳」の活用法について学んだ。予算的な措置がない限り、なかなか簡単には行えなかった研修ができたことは、重要な経験となったばかりか、授業づくり、指導案作成、また基本的な理解を深める上でも有用であった。

（５）　思いやりと自己肯定感を育むための講演会と体験的活動の取組

昨年から実施している、命の教育コーディネーターの安藤節子氏を招いての講演会を今年も実施した。本校は、昨年度の全国学力学習状況調査において、自己肯定感に課題の見られる部分があり、『I am OK. You are OK. We are OK』という自己、そして他への肯定感を高めることを期待した。命が生まれるまでがいかに奇跡の連続であるのかを心をこめて語られる安藤先生の姿に引き込まれる生徒の姿や、講演会後の職員、保護者との交流は、貴重な機会となった。

また、地域との結びつきのなかで行われる「あいさつ運動」「掃除しまクリーン」の取組は、生徒会とＰＴＡが協力して行われた。地域や保護者との交流のなかではぐくまれる道徳的価値の高まりは、地域と保護者の生徒たちを思う気持ちの大きさを再確認する機会ともなった。

５　研究の評価

（１）　研究の成果

道徳に関するアンケートを年度当初と年度末に実施した。この２回の同じ質問用紙による結果によると，全体として，どの項目もより良い方向への変化が見られる。第１学年においては，もともと「道徳の時間」への肯定的な印象が高かったこともあり，その数値の変化は小さいが，

１，「道徳の時間」の勉強は好きだ。

２，「道徳の時間」の勉強はためになる。

３，「道徳の時間」では，他の人の考えを聞きながら，自分のことを考える。

という「道徳の時間」に関する３つの質問に対する回答の傾向がいずれも肯定的な数値の高まりを明確に示していた。このことは，教材開発を学び，授業の構成を工夫し，その質を高めることで，生徒の心に響く「道徳の時間」の実現をめざしてきた本校としては望ましい結果であったといえる。

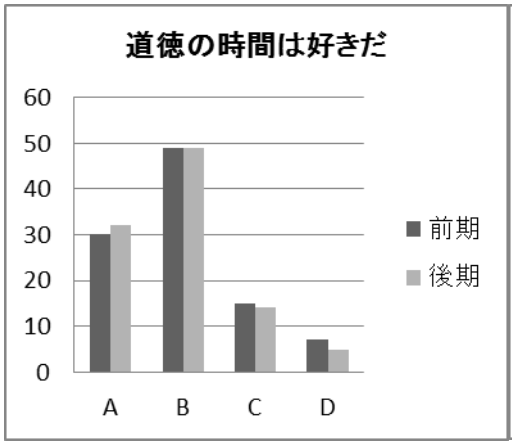
また，「自己を見つめ，よりよい生き方を考える生徒の育成」を研究のテーマとして掲げていた本校としては，授業の質の問題や，そこでの生徒の変化だけでなく，日常生活において生徒の変容がどのようなものであったかが，結果を評価するにあたって，最も重要なポイントとなっていた。その意味では，質問項目の４～１１に見られる意識の向上が，

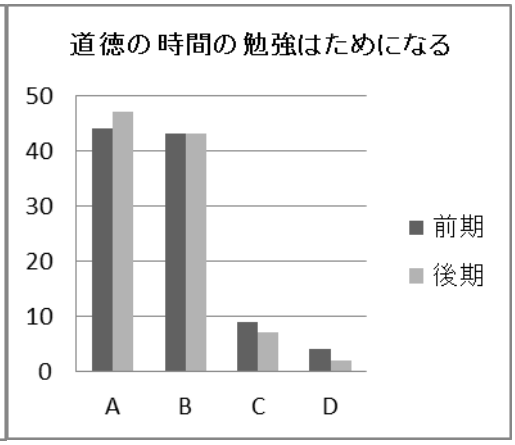
１２，学級活動では，互いを信頼して話し合い，励ましあってよりよい学校生活を作ろうとしている。

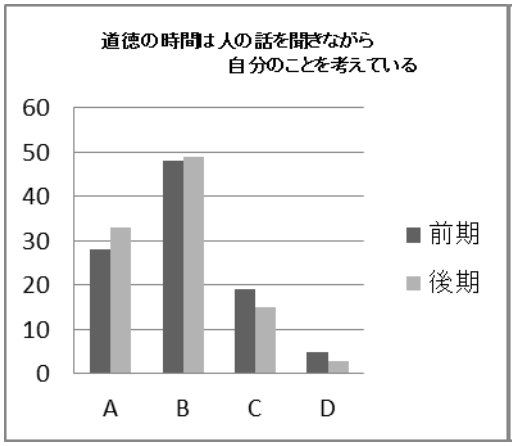
１３，生徒会活動や学校行事などにおいて学校の一員としての役割や責任をしっかりと果たしている。

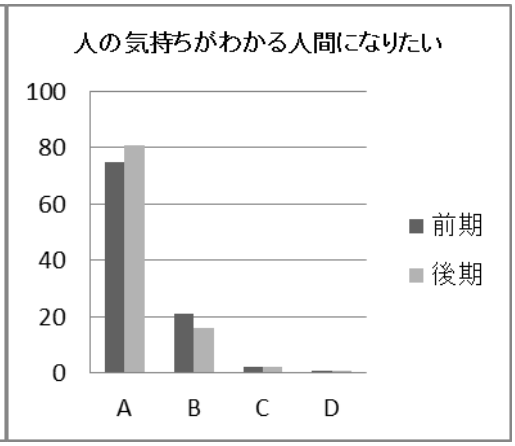
の２つの質問の結果につながっているかどうかを重視していた。つまりは，日常の生活に実際に学びが生かされているかどうかが今回の研究の成否を示しているともいえると考えてい

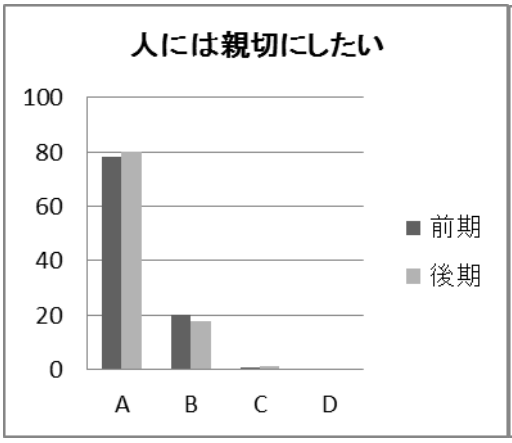
た。研究途上に，「授業で高まった道徳的価値が，実際の生活の中に生かされている実感が薄い」との問題意識を受け，そこへの対策を立てるための道徳講座も開いてきたものの，どのような結果になるかは不安な面もあった。しかし，今回の調査結果では，内面的な質問と同様に，アウトプットの部分でも生徒たちが自分たちの生活をよりよいものにするために自分たちなりに工夫を始めている様子が浮き彫りになってきた。ただし，積極的な方向と共に，わかってはいるけれどもまだ行動にするまでにはいたっていない生徒の存在も明らかであり，大いに自信を深めつつも，そうした層への手立てをどう進めるかも重要な課題として存在することが明らかになった。

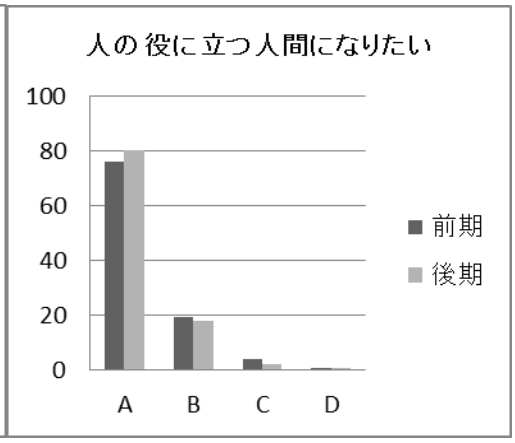


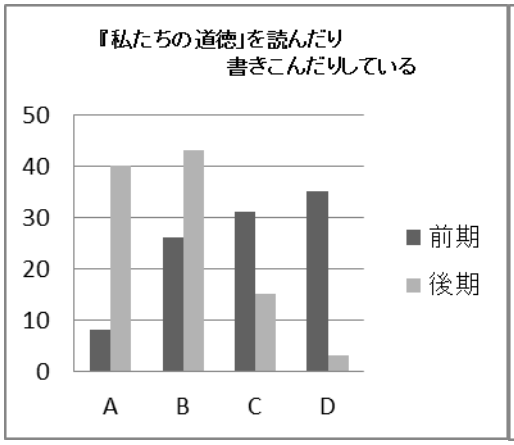


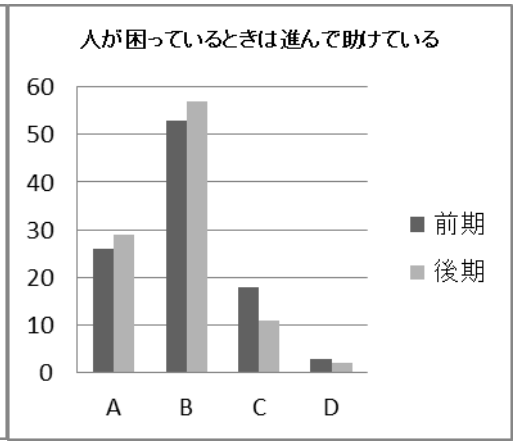


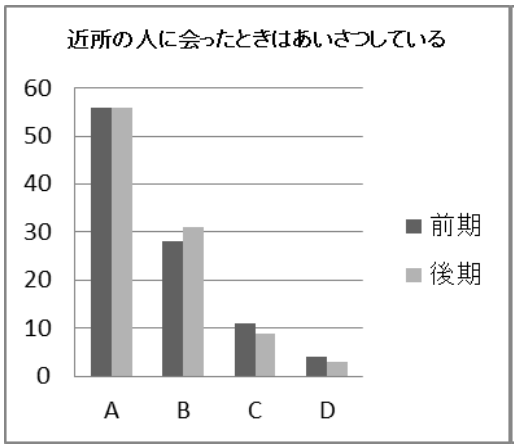


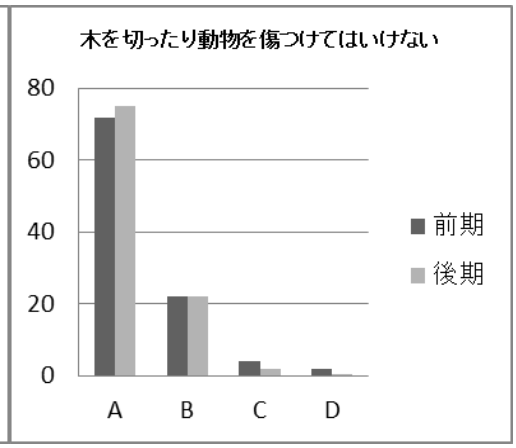


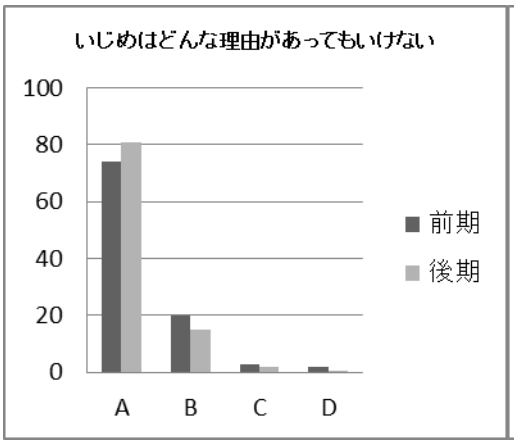


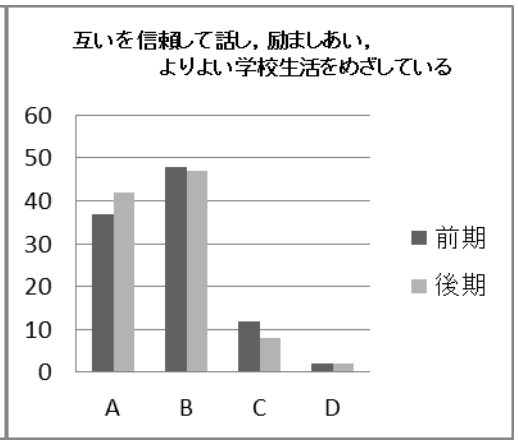


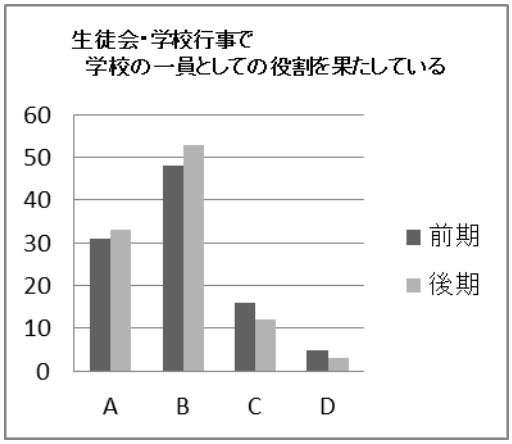












A　そう思う

B　どちらかといえばそう思う

C　どちらかといえばそう思わない

D　そう思わない

（２）　今後の課題と取組

第１は，生徒への働きかけの問題である。

生徒の変化は，数字的にも明らかであるし，実感として感じられる部分もある。ただ，Ｑ－Ｕによる学級状況の分析のなかで明らかになった問題点への対策や，道徳教育推進校としての授業改善の取り組みがすべて順調に動いているわけではない。Ｑ－Ｕの結果から導き出される，要支援群への働きかけの必要性は，今回の意識調査で明らかとなった，実際の生活に学びを生かすことができないでいる生徒への働きかけの必要性と重なる部分も多いと考える。数字が明らかにする部分への取り組みは，これまでに行ってきた生徒の状況に応じた徳目の設定と共に，今後もその継続が求められる部分であると考えている。

第２は，教員集団としての取り組みの問題である。

職員集団が授業力を高め，自らが感動し，是非生徒に与えたいと思える教材開発を行う実践は，スタートに立ったところであり，その実践については経験の積み重ねが求められている。今後の現職教育において，道徳教育を学校教育のあらゆる点において意識した取り組みを続けていくことが求められている。

第３は，地域との関わりの問題である。

本校がこれまでに積み重ねてきた地域や保護者と共にすすめる様々な取り組みは，地域の方々の献身的な努力や自己犠牲の精神によって成立している部分も多かった。地域と結びついた活動が，高い教育的価値をもつことは明らかで，その発展が学校や生徒の更なる成長の礎となる可能性は計り知れない。今後は，その可能性を高めるために，防災訓練でも示された，地域と協同して行う「地域づくり」に対してどんなことができるのかという視点の追求が，重要な課題となることを自覚していく必要があると考えている。